

高浜虚子

「猫」の頃



# 「猫」の頃



漱石が「我輩は猫である」を書きはじめた頃の事をふりかえって見る。その頃私はホトトギスの編輯へんしゅうの暇がある毎ごとによく漱石を訪ねた。何を話したかは少しも覚えがないがフラフラと出かけて行って平凡な話をしてフラフラと帰って来たのに違いない。その頃漱石居を訪う人は余り多く無かった様に思う。遂ついぞ私は他の客に出遇ったことがなかった。只寺田寅彦君ただが折々訪ねて来る位のものであった。……

その頃私は四方<sup>しほう</sup>太<sup>だ</sup>、鼠骨<sup>そこつ</sup>、左千夫<sup>さちお</sup>、節<sup>たかし</sup>など一しよに文章会を開いていた。それは毎月自作の文章を持ち寄つて朗読して互に批評し合うのであった。その文章会に持つて行つて読んでみるから、一つ漱石にも何か文章を作つて見てはどうかと云うことを話した。それからその文章会の日になつて私は漱石の家に寄つて文章が出来ているかとうかを慥<sup>たしか</sup>めた。大方出来ていないであろうと想像したが、案外にも出来ていた。出来ていた許<sup>ばか</sup>りでなく私の来るのを待っているのであった。それから、「二つ読んで見て呉れませんか。」とのことであつた。

私は作者の前で声をあげてその一篇を朗読した。漱石は他人の作をきいて鑑賞するように熱心に聞いていた。そしておかしい所に到ると声をあげて笑った。朗読している私も覚えすずフキ出さざるを得ない場合があった。

これが「猫」の第一回である。続いて「倫敦塔」ロンドンとうという文章が書かれて帝国文学の編輯者の手許まで送られた。

その日は朗読に相当時間を費して文章会に出席するのが遅れた。私は早く出席しなければならぬと心急ぎがしたが漱石は愉快そうに私の朗読を聴いて居って時間のた

つのも知らぬらしかった。それからこの一篇の標題がまだきめてなかった。「猫伝」としようか或は冒頭の一句の「我輩は猫である」というのをとってそのまま標題としようかどうしたものであるかと私に相談をした。私は無論「吾輩は猫である」の方を取ると云った。それから漱石に所々に冗じょうもんく文句と思わるるものがあるのを削りつつても好いかと念を押した。漱石はどうでもして呉れとの事であった。その席上でも一、二の文句は削り去ることを勧めた。漱石は筆を執ってそこを削り去ったと記憶している。



後の漱石は私がそう云うことを云つても軽々しくは肯<sup>がえん</sup>じなかつたであろう。殊に虞美人草を書くようになつてから後の漱石は自分の原稿を消して書きなおすと云うようなこともしなかつた。一旦筆を下した以上は丁度相撲がとり組んだものの様で、もう後には引けぬと云つていた。自分でも直すことを肯<sup>がえ</sup>んじぬ位であるから、まして他人の言を聞いて抹殺するとか改削するとかいうようなことは容易<sup>たやすく</sup>承知しなかつたであろう。が始めて猫を書いた時分の漱石はまだそれほどに自信がなかつたので容易に私の云う事を聞いた。そこで自宅に帰つて後に、

私は作文書生の文章を点検するような積りで、仔細にこの猫の文章を検けみして無用の文句と思われるものは削除してしまった。私は今でも決して無益の削除をしたものとは思わない、これが為に全体が引き締まっていると思う。適当な剪除せんじよを為し得たものと思う。今でも少しも後悔するところはない。が猫の第二回以来は一躍して漱石が文壇の人となったので私は謹んでそういうことはしなかった。漱石の文章にはどちらかと云えば無駄が多い。剪採せんさいすべき部分が沢山そのままにしてある様な感じがする。吾が輩は猫であるの第一回と第二回以下とを仔細に読み

くらべて見たならばおのずか白ら明かになるであろう。吾が輩は猫であるがホトトギスに発表せられると同時に、倫敦塔が帝国文学誌上に発表せられた。天下の読書子が立ち騒いだ。殊に大学の学生や卒業生の仲間が大学の教師がかかる創作を為したということに驚喜した。漱石は一躍して文壇の大家となった。それから矢継早に創作を試みた。

始め猫は第一回きりで止めようかとも云った。或は二回以下続けて見ようかとも云った。

「猫は続けて書こうかどうしようか。かくのならば材

料はいくらでもあるのですが……」と漱石は私に向つて云つた。私は無論つづけて書くことを望んだ。……そして二回の時も私に朗読さすことは一回の通りであつた。

そうしてそれを聴きながら可笑おかしいところに至るごとに嬉々として笑うこともまた第一回するときの通りであつた。第三回するときも第四回するときもいつもそれは例ならいになつていた。第二回以下るときに甚だしい冗文句と思われ  
るものに出くわすと、私は少し朗読の声を絶つて不興な  
顔をするのであつたが、漱石は最早それらのことに頓着  
することなしに早く次を朗読することを促した。……

私の漱石に対して抱く最も懐しい感じは郷里の松山ではじめて漱石に会った時から、漱石が自ら作家を以てたとうと志を定めたまでの間にある。漱石が作家を以て立つようになってからの私との関係はどうもその昔ほど無邪気に行かなかつた。猫の第一回をホトトギスに載せる頃は何にも心に介意する所はなかつた。けれども一旦その猫の評判がよくて忽ち文壇の大家になった漱石に対しては何処となく第二回以下をたのむのにたのみづらくなつた。

「第二回を書く方がよければ書こうか。」と云う漱石

の言葉には少しも不純なものは交ってなかった。しかし私の

「ええ。書いて下さい」と云う言葉のうちには多少重たい響きがあった。

「何か文章を書いて御覧なさい、文章会に持って行って読んで見ますから」と云うように軽く無邪気には云えなかつた。第三回、第四回と数が重なるにつれていよいよその傾向は著しくなつて来た。私がペンを執つて猫の第一回の文章のところどころを抹殺した心地は、一漱石の文章を完璧なものにしようという心ばかりであつて、

何等そこに斟酌しんしゃくはなかつたのであるが、第二回以下の多少飽き足らぬ節のあるのもその儘ままにして置こうと云う心のうちは、さきのように軽くすなおな心持ではなくなつた。私の我儘な心持から云つたらばいつまでも漱石は大学の教師であつて、ただ余技として文章を書き俳句を作る人でありたかつた。そうして私と共に談笑して二時間も三時間も無用のことを談笑し時には謡をうたつて時間を空費する人でありたかつた。

（「改造」昭和二年六月）





日本文学電子図書館

---

「猫」の頃

著 者：高浜虚子

制作者：宮澤一郎

底 本：「漱石追想」

岩波文庫、岩波書店

2016年3月25日 第1刷発行

---

日本文学電子図書館